

第3章 意見・要望の整理

新しい学校づくりを進めるために、学校施設に関する要望を把握する教職員アンケート及び教職員ヒアリング、村民有志とのワークショップ、子どもたちとの意見交換を行った。また、学校関係者や保護者代表、村民代表に各分野の有識者を加えた「新しい時代の利島の学校づくりのための協議会」を3回開催した。その中から、新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業の事業計画で示した4つの課題に沿って、意見や要望を整理する。

【今年度の実施概要】

		実施日	対象・参加者
教職員ヒアリング		令和5年 8月23日	利島小中学校教職員 教職員 6名
教職員アンケート（オンライン） 回答率：59%（22名中13名より回答）		令和5年10月 3日～ 令和5年10月19日	利島小中学校教職員 13名より回答
村民ワークショップ		令和5年10月26日	村長・村民 計8名（有志）
村役場管理職打合せ		令和5年11月22日	村役場職員 計10名
子どもたちとの意見交換 「利島の未来について」（オンライン）		令和6年 1月17日	村長・利島小学校児童 4名
協議会*	キックオフミーティング	令和5年 8月22日	委員ほか14名
	第1回協議会	令和5年10月26日	委員ほか11名
	第2回協議会	令和6年 2月 9日	委員ほか 8名
有識者オンライン会議（個別ヒアリング）		令和6年 2月28日	有識者4名

* 協議会：新しい時代の利島の学校づくりのための協議会

3 – 1 教職員

利島村小中学校教職員を対象としたヒアリングやアンケートにおいて抽出された意見・要望を「新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業（利島村）」に示した4つの課題で整理する。長寿命化改修も視野に入れ、既存校舎の活動状況と課題についても、同様に整理する。

*教職員ヒアリング：利島の学校ならではのよさと課題、施設の要望、小中連携やICTの活用などのあり方についてヒアリングを実施した。

*教職員アンケート：施設整備の課題を示し、特に関心がある項目を選択して関係する意見を記述してもらった。また各室の要望や現在の教育活動で今後も継続したいこと、生かしたい場所、離島の課題、今後の施設整備の進め方などについて記述してもらった。

(1) 教育DXにより学制発布以来の転換点にある学校教育を実現する施設環境

○小中学校の教育観の違い

- ・少人数を最大限活かせる学校にしたいという一方で、指導方法は小中で隔たりがあり、小学校で個に応じた学びを実践しても、中学校では高校入試があるため、小学校で培った資質・能力が活かされていないといった課題も指摘された。

○少人数を活かした学びの場

- ・学年の枠を超えて、多様な学びに対応する場としてオープンスペースが求められた。学年を超えた交流が図りやすいという利点と間仕切りを開放することに対し、課題を明確にしたいという意見もあった。

○遠隔地との交流など教育機会を提供するICT環境

- ・他島や内地とのつながりを充実させたい。1人でも多くの同級生の意見にふれ合う機会を充実させたい。遠隔地との交流授業は魅力がある。

○学年や学校種別を超えて対話・協働・交流できる環境

- ・小中の枠を超えた教育活動を実践しているが、既存の教室では広さが不足している。全児童生徒が集まり、成果の発表などができるスペースを望む。小規模校だからこそ、より多くの学年や人材と係わりながら学習に取り組めるとよい。

○9年間の成長を実感できる環境

- ・小中学校合同の文化祭や運動会、児童生徒会活動、ふるさと学習など、小中9年間を通した活動を行っている。
- ・中学校の教員が小学生も教えることで専門性の高い学習ができる。
- ・「ここに行けば児童生徒の作品を見ることができる」という場所を望む。児童・生徒の作品を気軽に掲示・発表できるスペースがあることで、普段見られない授業を互いに知ることができる。

○教員の学びの場となる環境づくり

- ・時代も変化しており、最新の教育事情を学ぶ機会望む。
- ・利島小中学校ならではの教育活動を継続していきたい。

○小規模だからこそ実現可能な小中教職員の連携

- ・中学校の教員が小学校の授業にチームティーチングで参加している。小中のコミュニケーションを大切にしている。9年間の系統立てた教育が展開できる利点がある。

- ・一方で、小中では学校文化や校務分掌が異なり、小中教職員のコミュニケーション環境が大切である。

(2) 島民全員にとって、生涯を通した学びの拠点となる学校施設

○学校と地域の関係づくり

- ・保護者だけでなく村民も気軽に学校に足を運び、子どもたちと関わることが、利島ならではのコミュニティの強みである。一方、コロナ禍でコミュニティのあり方が変化し、村民との交流の機会が設けられるとよい。

○公共資産として村民と共用する施設

- ・村の文化施設が不足しているため、学校図書館が村の図書館を兼ねている。
- ・保育園、診療所、村役場、郷土資料館、教育委員会などの公共施設が、全て同じ建物にあることで連携が深まるのではないか。

○みんなの居場所になる充実した学校図書館

- ・学校図書館の蔵書管理や貸し出し方法について、図書情報システムを求める。他にデジタルコンテンツの導入、書庫スペースの拡充、司書の常駐を求める。
- ・村民が授業中でも図書館を使える仕組みや自習スペースの確保、読み聞かせなどのイベント、誰もが使いやすいバリアフリー化をしてほしい。

(3) 水不足の歴史等を踏まえ「サステイナブルな島」を実現するための学校施設

- ・村の水道事情では水遊びも頻繁に行えないため、電気、ガス、水道など限られた資源を大切に利用する方策が必要である。
- ・離島ならではの考え方として、物を大切にする風土があるので、修理できる施設や場所が必要である。

(4) 村民のよりどころとなる利島のシンボルとなる学校施設

○歴史文化の継承の場

- ・椿の木で作ったオブジェが玄関前に置かれているなど、利島の文化を感じられる場所になるとよい。

○景観の良さを活かした施設づくり

- ・利島の自然や季節の移り変わり、海や山が眺められる教室など、現在の環境の良さを活かしたい。

(5) 現在の施設環境における意見・課題

○施設規模・施設配置・階数など

- ・現在の校舎はコンパクトで生活しやすい。
- ・子どもたちの居場所は2階までとしたい。
- ・体育館が遠くて不便である。近くにあれば安全に使える。

○長寿命化や維持管理への課題・要望

- ・様々な修繕が業者の事情などにより遅延しているため、更新しやすい設備の導入など将来を見据えた施設整備を望む。

○教室配置など

- ・小中の教室が同じ階で隣接することに対し、校時が違うため小学生の声がテスト中に響くなどの環境改善を求める。
- ・少人数なので、大きなワンルームの中で学びの場所を用意する考え方もよいのではないか。

○特別教室

- ・現状の音楽室は防音性能が確保されていない。音楽以外にも多目的に利用したい。
- ・教科の特色を活かせる環境づくりや雰囲気づくりを行いたい、もっと有効活用したい、ゆとりあるスペースを確保したい。

○気持ちよく使えるトイレ

- ・トイレが1か所しかなく、職員や来校者も利用している、設置数も少ない。また体格が異なのに同じサイズの便器しかない、和便器の洋便器化、ウォシュレットなどを求める。
- ・トイレが階段の踊り場にあるため、誰でもトイレの設置やバリアフリーな環境づくりを行い、多様な児童生徒への配慮が必要。
- ・校庭利用時の屋外用トイレがないことも課題。

○更衣・児童生徒の収納スペース

- ・児童生徒の更衣室が必要。
- ・ランドセルや通学用カバンの置場が十分ではない。

○みんなで楽しく食事ができるランチルーム

- ・小学生は2学年毎に教室、中学生は3学年まとめて多目的室で給食を食べている。給食を全校で一緒に食べられる場所があるとよい。
- ・事前に予約し有料で村民も給食を食べられるランチルームがあってもよい。
- ・一方でランチルームを設ける場合は給食利用時以外の活用方法が課題である。

○給食施設の考え方・課題など

- ・食材の搬入は職員玄関から廊下を通って運搬している。給食室に直接搬入できないため、検品等が行いにくい。
- ・人数が少ない学年は、子どもたちの配膳作業の負担が大きくなる。

○職員室

- ・小中の垣根をつくらないように、全体を見渡すことができるよう机の上に物を置かないといった工夫をしている。一方、小中の職員室や事務室を別々に設けてほしいという意見もある。
- ・コミュニケーションが取りやすい机のレイアウト、ラウンジスペース、執務に集中できる環境づくりなどを求める。
- ・書類収納スペースや倉庫が不足している。

○体育館

- ・冷暖房が完備された体育館、必要な体育器具が収納可能な体育倉庫の確保。
- ・ボルダリングやスラックラインなど、遊びを通して体力作りにつながる遊具。

○屋外スペース

- ・温室が校舎と離れており殆ど利用していない。校舎屋上に温室や菜園を設けてほしい。
- ・様々な種類の遊具の増設。一方で塩害や強風対策、定期的なメンテナンスが課題。
- ・芝生の校庭が学校の特色だが、維持管理が大変である。

○相談スペースと特別支援教室

- ・相談室と特別支援教室は別々に設けてほしい。

○学童保育や部活動

- ・放課後児童クラブ(学童保育)は、体育館2階のミーティングルームを主な活動場所としているが、遠い。
- ・部活動は、やりたい教員が自主的に担当しているが、外部委託を望む。

3－2 村民ワークショップ

利島村地域交流館で村民の参加希望者と、施設の課題と良い点、将来像を3つの「ら」（あら・たから・みらい）として、2グループで意見交換を行った。抽出された意見・要望を「新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業（利島村）」に示した4つの課題に沿って整理する。

（1）教育DXにより学制発布以来の転換点にある学校教育を実現する施設環境

○少人数を活かした個別最適な学びの環境

- ・児童生徒数の変動に対応できる教室やオープンスペースの導入など、小規模ならではの学びの場の工夫が望まれている。

○豊かで魅力あふれる自然環境

- ・海や山の眺望など、それ自体が村や学校の利点である。現在の校庭が天然の芝生であり村のたからである。自然から学べることが数多くある。

（2）島民全員にとって、生涯を通した学びの拠点となる学校施設

○学校と地域の関係づくり（現時点での課題①）

- ・村の行事と学校行事が別々に開催されるため、学校と地域の連携が図り切れていない。
- ・島唯一の学校であり、誰でもが学校に訪れることができるといい。

○多世代が集い学べる学校

- ・多世代が集い学べる学校、夜間も使えたり宿泊もできたりする複合的な機能を望む。

（3）水不足の歴史等を踏まえ「サステイナブルな島」を実現するための学校施設

○村民も給食を食べられる施設

- ・施設を新しく整備するのであれば、学校の給食を村民も食べられるようにしてほしい。

（4）村民のよりどころとなる利島のシンボルとなる学校施設

○シンボル性

- ・海や山への眺望、南側道路から校舎の様子が良く見える。子どもたちの姿が見えることが村のたからである。

○郷土教育

- ・郷土教育や島留学など、郷土愛を大切していきたい。

○利島の環境

- ・人口300人の島であり、お互いの顔を知っている関係が、よさでもあり課題もある。

（5）現在の施設環境における課題・意見

○学習環境

- ・施設の老朽化や床段差がありバリアフリーと言えない現在の課題への意見が多く、早期の改修や建て替えが期待されている。

○生活環境

- ・トイレの不足や更衣室の設置要望など、生活環境の改善が求められている。
- ・校舎内に交流の場がなく、地域と学校とのコミュニティの場が望まれている。

○利用動線・屋外環境

- ・校庭や遊び場が狭い、体育館への動線が不便など、校庭や校舎と体育館との位置関係の改善も期待されている。

	学校施設	地域開放/学地連携	島の環境
あら	<ul style="list-style-type: none"> ・老朽化 ・バリアフリー非対応 ・トイレや更衣室の不足 ・校庭、遊び場の狭さ ・交流の場がない ・不便な動線 ・校庭の芝生の管理負担 	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の利用制限増 ・年によって変わる学校の対応 ・村行事と学校行事の分離 	<ul style="list-style-type: none"> ・子も大人も息抜きできる場所少ない ・いやでも知れる環境 ・人間関係に行き詰まると大変
たから	<ul style="list-style-type: none"> ・海や山の眺望 ・南側道路から見える子ども達の姿 ・校庭の芝生 ・丁度良い広さの教室 	<ul style="list-style-type: none"> ・だれでも入ることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもらしく過ごせる ・自然から学べる ・子ども達は縦のつながりで育つ ・自分たちの子どもだと思える ・気が合えば、深く付き合える
みらい	<ul style="list-style-type: none"> ・バリアフリー対応 ・学年で人数が変わっても丁度良い広さの教室 ・オープンスペース ・ソロスポーツ活動の場 	<ul style="list-style-type: none"> ・多世代が集う ・多世代から学べる ・給食も一緒に食べられる ・夜も使える、泊まれる ・複合化 	<ul style="list-style-type: none"> ・郷土教育 ・島留学

村民ワークショップの意見 まとめ



村民ワークショップの様子（全体説明）



村民ワークショップの様子（意見交換）

3 – 3 児童生徒

令和6年1月15日に利島の未来について、4名の小学校児童が村長に提言を行う機会があった。出された意見・要望を「新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業（利島村）」に示した4つの課題に沿って整理する。

（1）教育DXにより学制発布以来の転換点にある学校教育を実現する施設環境

○最先端技術の活用

- ・塾が無い利島だからこそ、AIドリルなどを積極的に活用し、苦手分野の把握、成績の正確な分析、教師の負担軽減、時間の有効活用などを進めるべき。

○地場産業の発展

- ・椿を有効活用するための商品開発がしたい。

（2）島民全員にとって、生涯を通した学びの拠点となる学校施設

○バリアフリー

- ・障害者や高齢者が暮らしやすい利島であってほしい。そのために、スロープを増やしたり、電動車椅子を整備したりしてほしい。

○同世代が集える場

- ・多世代交流も重要であるが、同じ年代の人が集まれる施設がないことが課題。

（3）水不足の歴史等を踏まえ「サステイナブルな島」を実現するための学校施設

○ゴミ問題の解決

- ・例えば、自動で生ごみを回収し肥料にする技術を活用し、島の課題解決を図っていくべきだ。

（4）村民のよりどころとなる利島のシンボルとなる学校施設

○椿を知る機会

- ・島の基幹産業である椿油の生産について、子供たちや島民がもっと知る機会を確保すべき。

3－4 有識者を含む協議会委員

村代表の協議会委員や外部有識者委員から、キックオフミーティングを含め3回の協議会、及び有識者委員とのオンラインヒアリングの機会を持った。既存校舎の活動状況や課題と合わせて、学校づくりの目標や利島村の教育の方向性などの意見をテーマ毎に整理する。

(1) 教育DXにより学制発布以来の転換点にある学校教育を実現する施設環境

○村民の学校教育への関心と当事者意識の向上

- ・様々な集団や学年を超えた活動など、互いに助け合える関係性を築き、学校全体が一つの大きな学びの場・生活の場と捉えることが大切である。
- ・学校の中の学びのみならず、移住者や来島者との関係づくり、教職員の学びの場の提供など、島外との関係づくりが課題。
- ・不登校や学習進度の遅れ、未習熟のまま進級してしまわないように、「だれ一人取り残さない学校づくり」が大切。
- ・教職員の意識改革や新しい学びへの理解を通して、自分たちがつくりあげた学校であるという共通意識が持てる学校づくりを望む。

○少人数を活かした個別最適な学びの環境

- ・現在の教室の広さの使い勝手のよさはあるが、先進校を視察し、これから学びを鑑みた場合、オープンスペースの導入を望む。利点や課題の議論を重ねながら、計画に反映していきたい。
- ・オープンスペースと教室が一体の空間となるが故に、全館空調の必要性から冷暖房負荷の増加など、維持管理コストの課題もある。
- ・学年の人数によって、音環境や居場所のつくり方も異なる。
- ・音に敏感な子どもへの環境配慮として、教室まわりに音を仕切れる部屋を組み合わせて設けるなど、環境づくりの工夫が必要。
- ・座って講義を受けるだけではなく、自由に動けるスペースがあるとよい。

○遠隔地との交流など教育機会を提供するICT環境

- ・ネットワークを活用し世界とつながるなど「つながる学校」という概念を教育大綱の3つ柱（①当事者、②自立、③一体感）に掛け合わせて捉え直せるとよい。
- ・既にネットワーク環境が整えられ1人1台の端末整備が進められているが、学びの変化に対応した更なるICT環境の可能性について議論していくとよい。

(2) 島民全員にとって、生涯を通した学びの拠点となる学校施設

○学校と地域の関係づくり

- ・教室の地域利用は敷居が高いため、多目的に活用できるスペースがあると地域利用しやすい。学校と地域が共に「おらが学校」の意識を持つるとよい。
- ・「みんなの学校」として学校を捉えていくことが重要であり、村民と議論を積み重ねることで学校の姿が見えてくる。学校が災害時の安全性を含め村の生活を支える様々な考え方を集約したもののが本計画につながる。

○公共資産として村民とシェアする施設環境

- ・庁舎の老朽化も進んでおり、様々な公共施設の集約化を望む。
- ・学校に村民が有効活用できる場所があるとよい。教育委員会事務局が学校内にあることで教職員と連携が図りやすい。
- ・小中学校との関係性や築年数などを鑑み、保育所の建替えの方向性については村内で議論を継続していく。
- ・学校に村民が集うためにも、校内に村民がアクセスできるネットワーク環境の整備が望まれる。1つのアクセスポイントでも学校のネットワークと分割して村民が使用できる Wi-Fi 環境の整備も可能。

○みんなの居場所になる充実した学校図書館

- ・図書館には村民がいつでも立ち寄れ、特別教室も様々な活動ができる地域に開かれた場所にする。学校が教育の場であると共に地域の居場所と捉えることが大切である。それらを村の方々と話し合いを重ねながらつくりあげていく。
- ・村民が集える場所とするために、学校を地域の場にできないか、そのためには、教職員とは異なる人員配置も合わせて考えていく必要がある。

(3) 水不足の歴史等を踏まえ「サステイナブルな島」を実現するための学校施設

○「サステイナブルな利島」の実現

- ・建て替えではなく改修で対応できることもある。資源を大切にする観点で理想的な改修が可能であれば、改修もあり得るのではないか。

○災害時の避難場所としての機能拡充

- ・学校の一部が土砂災害警戒区域に該当しており、建物の安全性を確保し災害時の避難所としても学校が地域に開かれた場所になるとよい。
- ・インターネット環境や電源の確保など非常時の通信設備の考え方も大切である。トイレや水まわりの設置数、設置場所など、日常利用と合わせて施設の課題が散見される。

(4) 村民のよりどころとなる利島のシンボルとなる学校施設

- ・“島民みんなの学校”をキーワードとして掲げ、利島村ならではの学校づくりに繋げていけるとよい。唯一の学校について様々な意見を踏まえながら、村一丸となって検討を進めていけることを望む。
- ・遠く離れていても利島の学校が人生の真ん中にあるという願いがこもったテーマを盛り込んでいけるとよい。

(5) 現在の施設環境における課題・意見

○長寿命化や維持管理

- ・校舎の老朽化と合わせてインフラも検討していくとよい。

○既存体育館との関係性

- ・体育館が離れており、授業時の移動に時間要するなど、新校舎との距離感の改善が必要。

○小中一体で利用する教室配置

- ・小3から中3までが2階の教室で授業を行っており、小中の時程の差が生じている。小中は別々の階の方が活動しやすい。

○更衣・児童生徒の収納スペース

- ・更衣室がないなど時代に合った環境が整えられていないと安心して子どもを預けられない。

○特別支援学級

- ・特別な支援を要する児童生徒の障害種別に応じて、臨機応変に対応できる教室まわりのつくり方や配慮ができるとよい。

第4章 先進事例視察

4-1 視察対象校の概要

新しい時代の利島村の学校づくりのために先進事例として、2023年10月に青ヶ島村立青ヶ島小中学校、11月に大熊町立学び舎ゆめの森の2校を視察した。各校の施設概要を以下に示す。

(1) 青ヶ島村立青ヶ島小中学校

○視察概要

- ・視察日：2023年10月23日（月）

○視察目的

- ・離島の学校づくり。極小規模校。築30年ほど経つが、オープンスペースの整備や教科センター方式の採用など、意欲的な学校施設の計画事例として視察

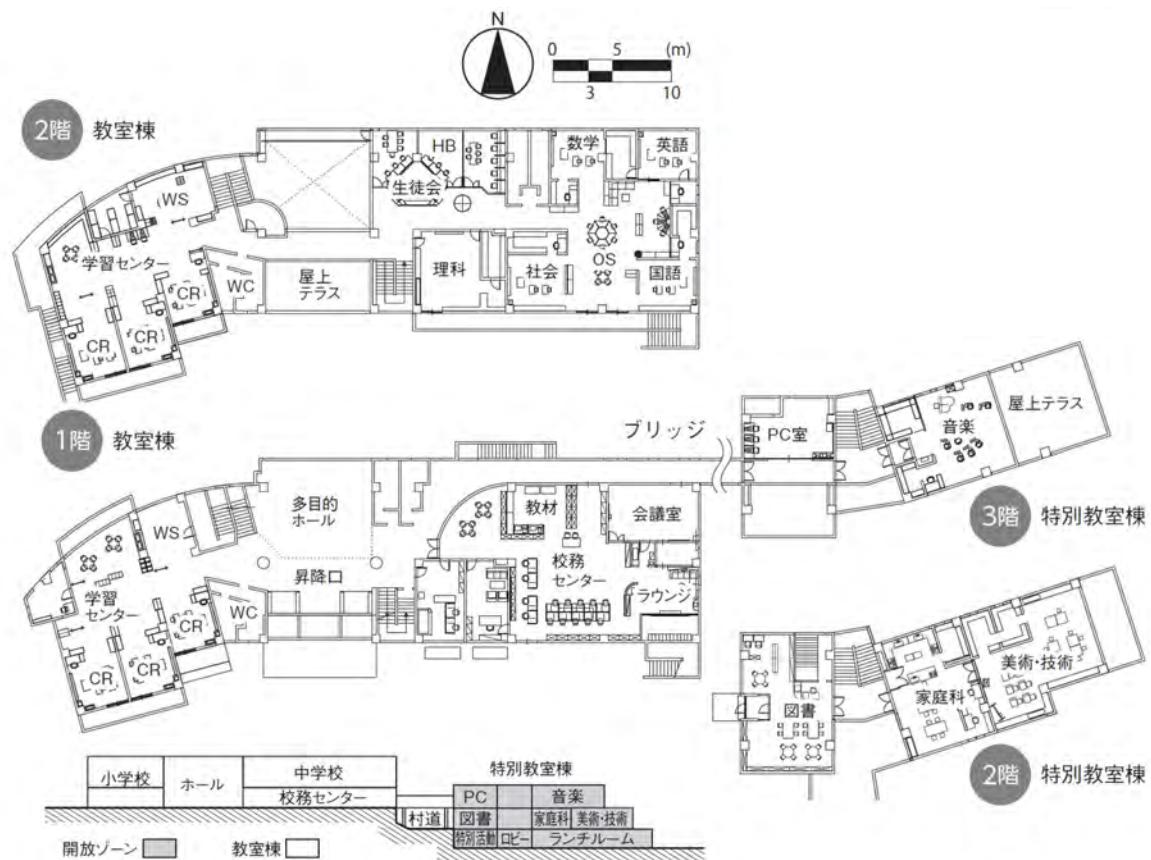
○概要

- ・所在地 : 東京都青ヶ島村
- ・敷地面積 : 8, 890 m²
- ・延床面積 : 3, 965 m²
- ・構造・階数 : 鉄筋コンクリート造3階建て
- ・運用開始 : 1997年
- ・計画学級数 : 小学校6クラス、中学校3クラス（小中共 各学年1クラス）
- ・児童・生徒数 : 小学生6名（小1・4は欠学級）、中学生3名（中3は欠学級）

○計画の経緯・概要

- ・青ヶ島村は伊豆諸島最南端に位置し、村民200人弱の日本一小さな村である。中学校を卒業すると島を離れ、村外の高校に通うことになる。15歳の旅立ちに備え、自立心を育む教育環境づくりが目標とされた。同時に、故郷青ヶ島の魅力である自然環境や伝統文化、村の人々の愛情を存分に体感できる学校づくりを目指して整備された。

○計画図



(2) 大熊町立学び舎ゆめの森

○視察概要

- ・視察日：2023年11月20日（月）

○視察目的

- ・極小規模校。0歳から15歳までの学びの拠点、町のシンボルとなる施設づくり、ICTの活用など、先進的な学習環境のあり方を観察

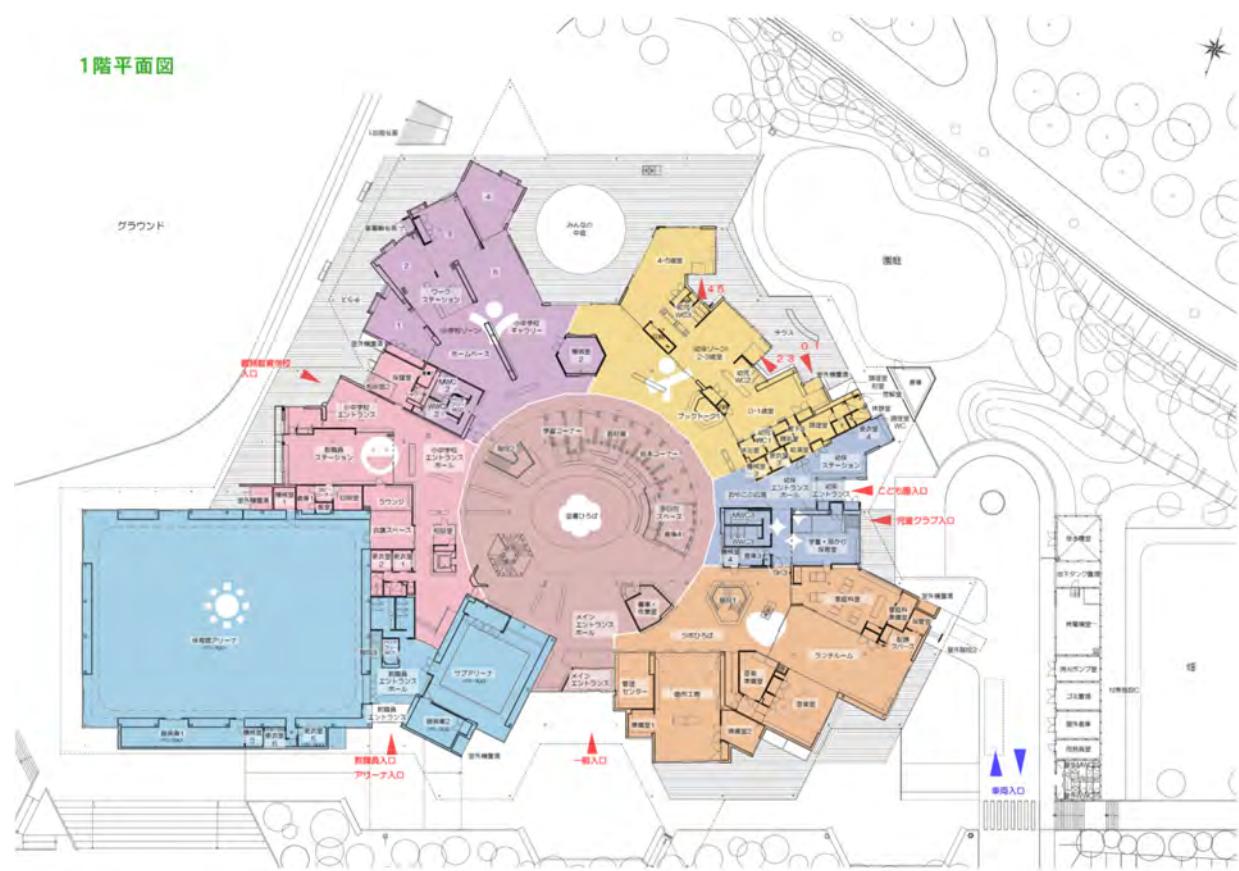
○概要

- ・所在地 : 福島県大熊町
- ・敷地面積 : 33, 170 m²
- ・延床面積 : 7, 917 m²
- ・構造・階数 : 鉄骨造2階建て
- ・運用開始 : 2023年
- ・計画学級数 : 1～6年 各学年1クラス計6クラス、7～9年 各学年1クラス計3クラス
- ・児童・生徒数 : こども園15名、児童生徒22名（視察時）

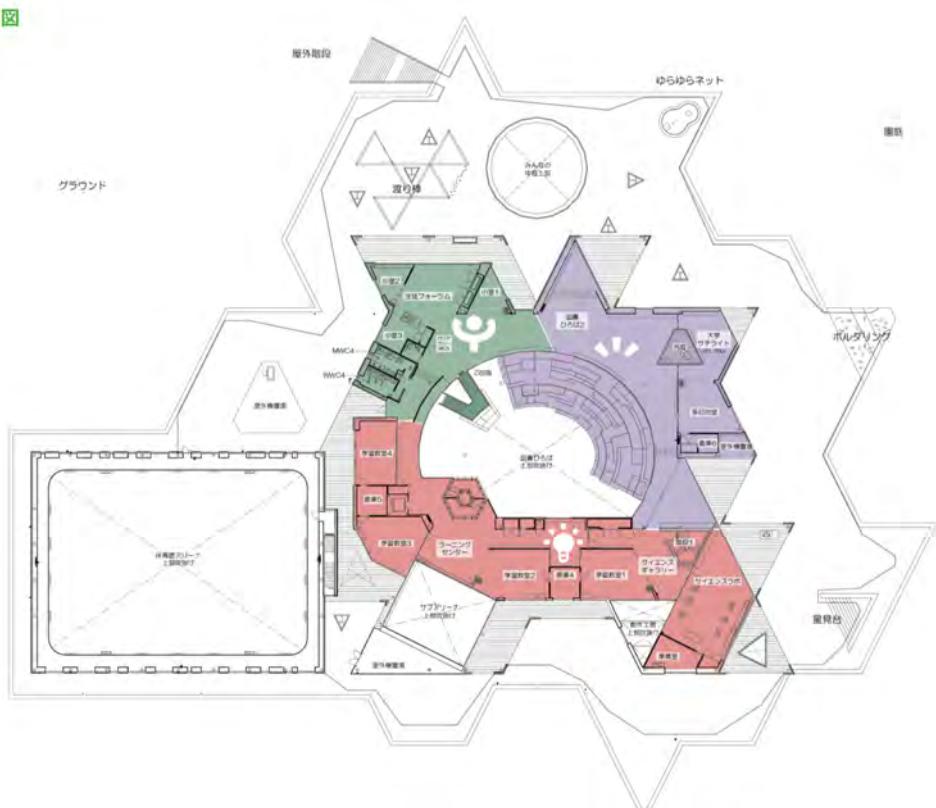
○計画の経緯・概要

- ・大熊町は、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故に伴い、全町避難を強いられるとともに、幼稚園、小・中学校の教育施設が約100km離れた会津若松市に移転を余儀なくされた。移転先で児童・生徒数が減少の一途をたどるなか、町では放射線量の低い大川原地区に復興拠点の整備を進め、役場機能を再開した。学校教育における帰町への取組みとして、保育所、幼稚園、小学校、中学校を一体的な施設とする教育施設の整備を進められた。0歳から15歳までが共に生活し、共に学ぶ、子どもと大人が交わる、全ての場所が創造的である、復興拠点となる大川原地区に子どもたちや地域住民も集うみんなの学び舎として開校した。

1階平面図



2階平面図



4－2 観察で得られた知見

先進事例の観察で得られた知見を、先導的開発事業計画書で示した4つのテーマ「教育DXにより学制発布以来の転換点にある学校教育を実現する施設環境」、「島全体にとって、生涯を通した学びの拠点となる学校施設」、「水不足の歴史等を踏まえ、「サステイナブルな島」を形成するための学校施設」、「村民の心のよりどころとなる利島のシンボルとなる学校施設」に沿って整理する。

(1) 教育DXにより学制発布以来の転換点にある学校教育を実現する施設環境

①青ヶ島村立青ヶ島小中学校

○小中の子どもたちが共に学ぶ場・9年間の成長と共に育まれる生活の場

- ・小学校の教室まわりは教室に学習センターと呼ぶオープンスペースを組み合わせた構成を基本とし、それに流しのあるワークスペースや教材室を用意することで多様な活動に応じられる教育空間としている。間仕切がなく一体的につながった明るく開放的な環境となっている。
- ・中学校では教科センター方式が採用されており、学習センター（オープンスペース）を中心として教師コーナーを持つ教科教室が配置されている。生徒ロッカーのあるホームベースは、3学年をまとめて配置され、生徒ラウンジが設けられている。
- ・築30年程度経つが、ネットワークを整備し、液晶モニターを用意したりしてICT環境が整えられている。

→少人数に応じた教室空間や学年を超えた協働的な学びの場を検討する。それに加えてICT環境整備が課題となる。



オープンスペースを持つ教室まわり（小学校）



教科毎の学びの場（中学校）

○管理諸室まわり

- ・オープンなスペースの中に、執務、ラウンジ、印刷・教材、作業スペースなどが用意され、全体のコミュニケーションが図りやすい構成となっている。
- ・一方で機微な話もできる音が仕切れる場所も用意されている。

②大熊町立学び舎ゆめの森

○小中の子どもたちが共に学ぶ場・9年間の成長と共に育まれる生活の場

- ・教室には可動間仕切が設けられ、児童数の増減に対応できるよう工夫されている。観察時は間仕切を開放していた。

→活動に応じて使い分けができるように、授業時の音環境などにも配慮できるようにする。

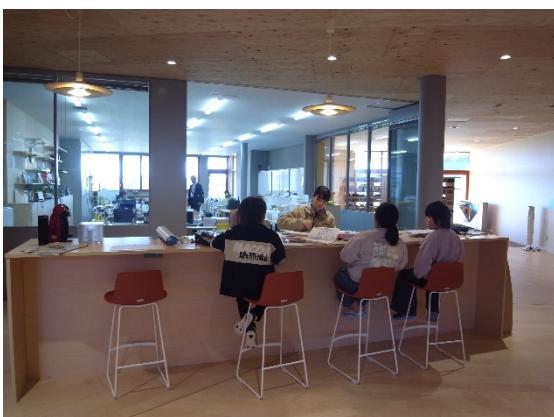
- ・中等部段階は教科教室型運営方式を採用しているが、数学教室を小学部の算数で利用するなど、小中を問わず教科教室が活用されている。
 - ・全ての教室にホワイトボードとプロジェクタが壁面に設置され、移動式ホワイトボードが用意されている。
 - ・職員室前のカウンターや図書ひろばのテーブルなど、教室に限らず校内中で学んでいた。
 - ・教室まわりにはベンチ等が設けられており、個別対応やクールダウンの場として使われている。
- 教室に留まらず、学校全体が学びの場となるよう、家具や収納計画と合わせて検討する。
- 少人数を活かし、学年や教科の枠を超えた学びの場を検討する。
- 多様な子どもたちに応じた居場所をつくることが求められる。



教室間の間仕切りを開放可能な教室まわり



学年を問わず利用される教科教室（数学）



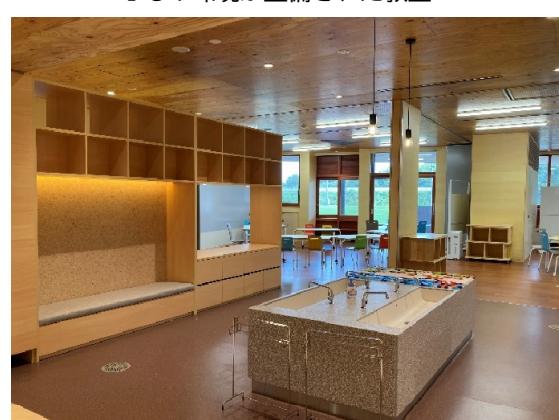
子どもたちの学びの場にもなる職員室まわり



I C T 環境が整備された教室



教室内の一角に設けられたベンチコーナー



教室前に設けられたベンチ・水まわり

○管理諸室まわり

- ・ノートPCの使用が主流となっており、執務机の上には書類などがあまり置かれていないため、室内全体が見通しのよい環境となっている。
- ・作業・リフレッシュスペース、個人ロッカーや更衣スペースが職員室の隣に配置されている。
- 個人の執務や協動作業の場と合わせて、リモート研修や会議に利用できる場所など、必要機能の整理が必要である。



見通しのよい職員スペース



職員室の隣にある作業・リフレッシュスペース

(2) 島全体にとって、生涯を通して学びの拠点となる学校施設

①青ヶ島村立青ヶ島小中学校

○地域住民が集う場

- ・学校図書館を島民がいつでも立ち寄れるようにしたり、特別教室棟を道路を渡った役場等の公共施設の中に配置し、村民が活用できるようにしたり工夫されている。音楽室は音楽ホール、児童生徒のランチルームは、村民の集う場として位置付けられている。教室棟のエントランスホールは全校集会や行事の場にもなる。
- 学校施設を学校教育の場であると同時に、村民がいつでも立ち寄り利用できる「みんなの居場所」としていくことが考えられる。



いつでも立ち寄れる図書館



地域でも利用可能な特別教室



入学式や卒業式も実施するホール

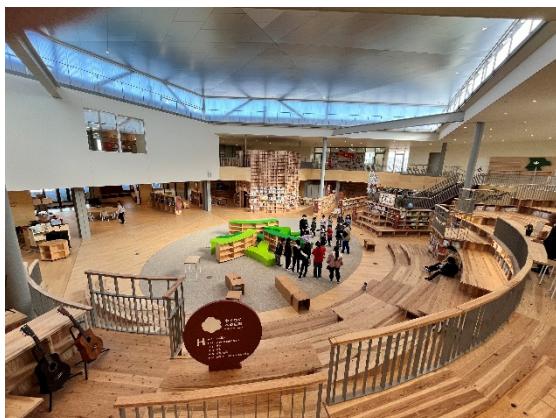


音楽ホール（音楽室）

②大熊町立学び舎ゆめの森

○多様な学びの場となる図書ひろば

- ・校舎の中心にすり鉢状の開放的な図書ひろばが設けられ、そのひろばを囲むように、こども園、教室、職員室、体育館、パレット（特別教室）が配置されている。子どもたちの活動が混じり合う多様な学びの場である。
→図書館を学校の中心と位置付け、教室や特別教室と関係付けた配置を検討することが有効である。
- ・図書ひろばには様々な居場所が用意されている。
→子どもたちが本を手に取り読みたくなるような環境づくりの工夫が求められる。
- ・図書ひろばの壁面に大画面で投影可能なプロジェクタが整備され、ダイナミックな発表活動が行えるようになっている。
→一人一台端末の個別最適な学びのためのICT活用だけではなく、充実した集会・発表活動を行うためのICT環境整備など総合的な検討が必要である。



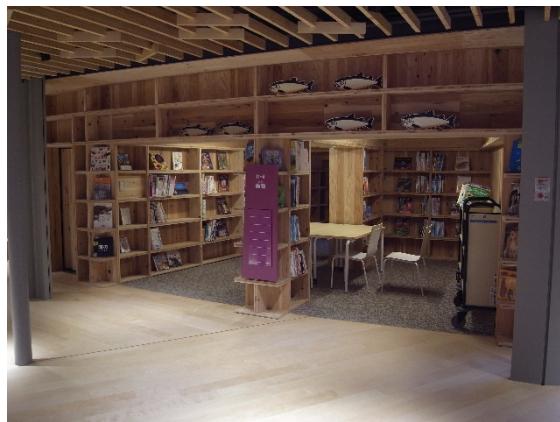
学校の中心となる象徴的な図書ひろば



朝の会でも活用される書架スペース



ソファなどが置かれた図書ひろば脇の通路



書架に囲まれた閲覧・学習スペース

○安全で管理しやすい地域開放ゾーン・特別教室まわり

- ・特別教室や体育施設などの地域開放エリアを1階に集約することで、地域開放しやすいゾーン構成としている。
→地域開放の運用方法と施設の配慮を同時に検討する必要がある。
- ・特別教室まわりには、教科の特色を演出できるメディアスペースが用意されている。
→教科の魅力を伝えられる教育空間、子どもたちの学習成果を共有できるメディアスペースのあり方を検討する。



音楽室をステージと見立てたランチルーム



ガラス張りで教科メディアとつながる理科室

○0歳から15歳が共に学ぶ場（こども園の併設）

- ・「ゆめの森」にはこども園が併設され、0歳から15歳までが共に成長する場とされている。中央の図書ひろばや屋外ひろばを介して、互いに交流できるように工夫されている。
- ・教室とこども園の保育スペースには人工芝の中庭や庇の深いテラス、起伏のある築山などが設けられ、年齢を問わず遊べる環境が整っている。
→子どもたちが安心して、のびのびと遊べる環境を如何に整備していくかが課題である。



木のぬくもりの感じられる保育室



保育室間をつなぐ水まわりスペース



学校とこども園間に設けられた人工芝の中庭



築山など起伏のある天然芝の園庭

(3) 水不足の歴史等を踏まえ、「サステイナブルな島」を形成するための学校施設

①青ヶ島村立青ヶ島小中学校

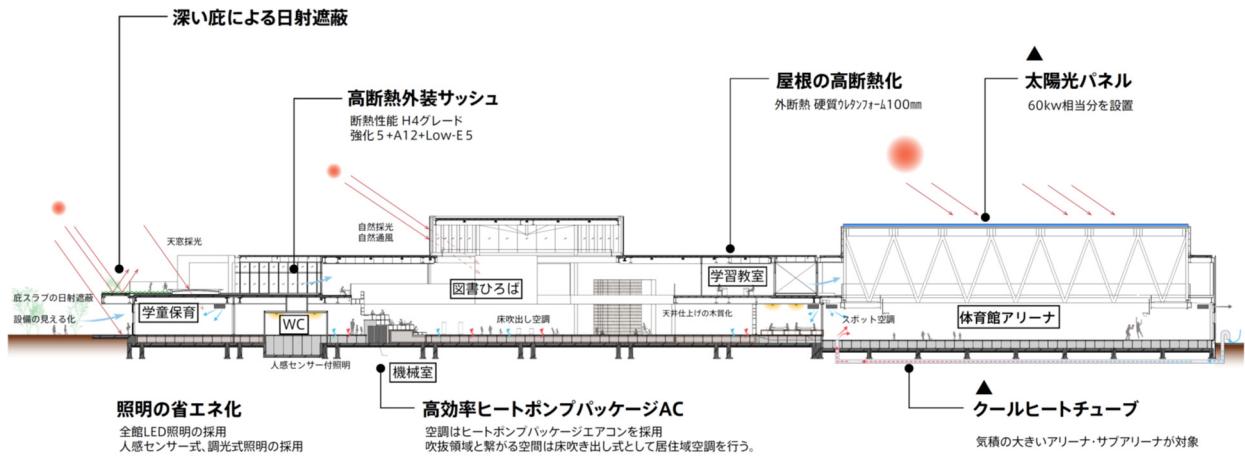
○村民体育館としての活用

- ・学校体育館を村民体育館として活用している。
→小規模の自治体として、機能が重なる施設を縦割りで別々に作るのではなく、機能を重ね合わせて効率的な施設整備を行うことが重要である。

②大熊町立学び舎ゆめの森

○脱炭素社会に向けた様々な環境対策の取組み

- ・高性能断熱サッシや屋根の高断熱化による外皮の断熱性能の向上、全館LED照明、人感センサーや調光式照明、高効率設備機器の導入、60kW相当の太陽光発電パネルやクールチューブなど再生可能エネルギー等の利用により、ZEB Readyに該当する校舎を実現している。
→利島小中学校においては、利島村の気候風土をふまえて建物の環境性能を高め、自然採光や自然通風を確保するなど、自然環境を最大限生かした環境対策に取り組んでいく必要がある。

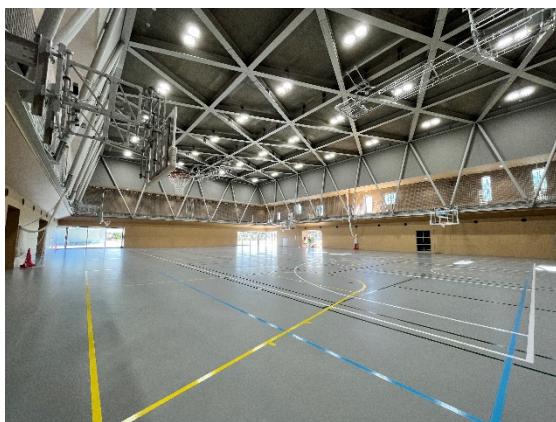


環境負荷低減手法 断面イメージ

*引用：大熊町新教育施設建築主体工事 設計概要

○防災拠点としての学校づくり

- ・太陽光発電＋蓄電池及び非常用発電機を設置し、災害時に300人の避難者数を想定した避難施設として機能する。体育館アリーナ、サブアリーナ、並びに体育館に付帯するトイレ、更衣室、会議スペース、ラウンジは、避難時に非常用発電機により空調・照明・コンセント等が使用可能なエリアとして区画されている。
 - ・体育館アリーナには災害時の運動スペースとしても利用可能なランニング走路が設けられている。
- 避難所エリアを明確にし、避難所機能の拡充を図るとともに、学校の早期再開が可能な施設構成することが求められる。
- 避難生活が長期化した際の健康維持についても施設面の配慮が必要である。



ランニング走路のある体育館アリーナ



外部と直接行き来可能な小アリーナ

(4) 村民の心のよりどころとなる利島のシンボルとなる学校施設

①青ヶ島村立青ヶ島小中学校

○大屋根が島のシンボルとなる校舎

- ・様々な場所から四季が感じられ、どこでも自分の居場所となる大きな家づくりをコンセプトと

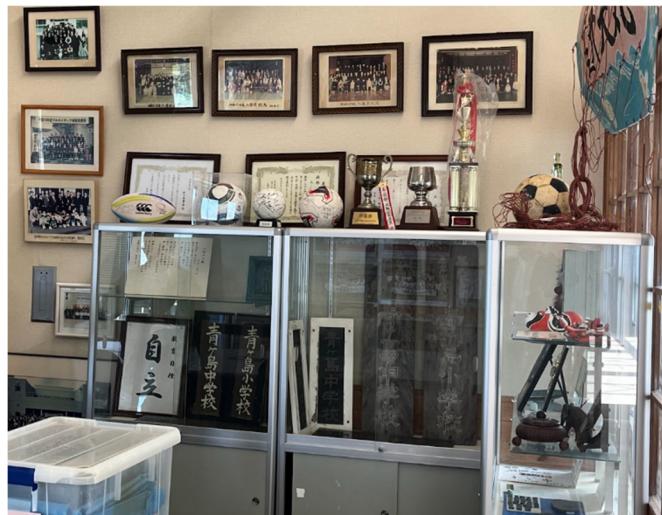
し、校舎の大屋根が島のシンボルになるようにつくられている。青ヶ島を1つの船に見立て、学校は「青ヶ島という船の未来のキャプテンを育てる場所」として位置付けられている。
→船着き場から校舎の見え方など、村のシンボルとなる校舎のデザインを検討する。

○学校の歴史を残す資料室

- ・青ヶ島小中学校の歴史を展示する資料室が設置されている。



Google maps より抜粋



青ヶ島という船の未来のキャプテンを育てる学校

学校の歴史を展示する資料室

②大熊町立学び舎ゆめの森

○町のシンボルとなるファサードデザイン

・校舎の中心にある図書ひろばは3層分の高さの吹抜けがあり、豊かな内部空間を実現している。
外装には木・アルミ・ガラスを採用し、表情豊かな特徴のあるデザインとなっている。
→校舎の外観デザインでは、海に面した利島ならではの環境に対し、塩害対策など利島の気候風土に応じて細やかな配慮が必要である。



災害復興住宅側からの校舎ファサード



壁面にも木材を活用した校舎

○心に残る活動を生み出し、様々な体験を育める環境

- ・校内には、コンセプトの1つでもある子どもたちが遊びながら学び、学びながら遊ぶ様々な工夫が盛り込まれている。上下階をつなぐ図書ひろばは、学びの場・遊びの場でもあり、イベント時のホールとしても活用されている。屋外にも上下階をつなぐ遊具など、様々な遊びの要素を取り入れた環境が整えられている。
→新しい学校施設では、子どもたちの学習体験を支える施設環境の実現が課題である。
- 海や山に囲まれた環境を生かし、教室から望む四季折々の景色や自然体験できる環境づくりを検討する。



壁に映像も投影できる図書ひろば



教室前に置かれた様々な形状のソファ



人工芝で整備された校庭



校舎外壁を活用したボルダリングスペース



雨天時も活動できる軒の深いテラス・遊具



上下階をつなぐネット遊具

○温かみと潤いのある施設環境（木のぬくもりのある学校づくり）

- ・内外装とも各所に木材を使用し、木のぬくもりが感じられ落ち着いた環境が整えられていた。
→利島村においても、東京都檜原村とのつながりも生かして、積極的に木材を活用したい。



木材を活用した明るく温かみのある内装



木の家具を用い壁面を構成した内装